

組織目標評価報告書（平成22年度）

部局名： 医歯薬学総合研究科(薬学系)

組織目標		達成状況(成果)
(下記3項目について、特に目標とする客観的指標がある場合は、数値データを引用して記載してください。)		
教育	1)平成24年度に開設予定の博士課程および同年度に改組予定の博士後期課程の設置申請へ向けた準備を行う。 2)博士後期課程創薬生命科学専攻に分子イメージング教育コースを平成23年度から導入するための準備を行う。 3)講義評価などを推進し、大学院教育の改善・充実を図る。 4)優秀な留学生を確保するため、外国人留学生特別選抜応募者の学力の確認を、平成21年度に導入された方法により実施する。	1)平成24年度に改組予定の博士課程および同年度に設置予定の博士後期課程の設置申請の準備を進め、同申請が本学役員政策会議での承認、文部科学省との事前相談を経て、本学教育研究評議会で承認された。 2)博士後期課程創薬生命科学専攻に平成23年度から分子イメージング教育コースが設定されることとなった。 3)学生による授業評価を推進し、いずれの科目も4.5以上の評価であった。また、薬学系独自の教員に対する授業自己評価アンケートを実施し、大学院教育の改善・充実を図った。 4)平成21年度に導入された方法により博士前期課程薬科学専攻における外国人留学生特別選抜応募者の学力の確認を実施し、3名の留学生が合格した。
	達成度： ④ 3 2 1	
研究	1)平成22年度特別経費プロジェクト「難治性感染症を標的とした創薬研究教育推進事業」を推進する。 2)インドにおける新興・再興感染症拠点を基盤として、感染症研究の進展を図る。 3)国際共同創薬基盤センターを設置し、国際交流研究や創薬研究の推進を図る。 4)科学研究費補助金の獲得や共同研究費、受託研究費、奨学寄付金等の外部研究資金の増加に努める。 5)化学物質の安全管理や研究室の安全性を高める取組みを行う。	1)平成23年2月に「第1回難治性感染症を標的とした創薬研究教育推進事業に関する国際シンポジウム」を開催し、本年度の成果報告並びに招待講演を行った。また、中国(上海中医薬大学、内蒙古大学および昆明植物研究所)、韓国(圓光大学、梨花女子大学)、インドネシア(ハサヌディン大学)並びにガーナ(ガーナ大学)と大学間あるいは部局間協定を結び、国際共同研究の推進基盤を構築した。 2)国内の8大学および2研究機関と共に、本年度から開始された文部科学省「感染症研究国際ネットワーク推進プログラム」に参画し、インドの本学新興・再興感染症拠点を中心となって、コレラ等の腸管感染症に関する国際共同研究を推進した(代表者:三好伸一教授)。また公開講演会「インドからみた腸管感染症」の開催などのアウトリーチ活動を行った。 3)上記「難治性感染症を標的とした創薬研究教育推進事業」の国内研究拠点となる「国際共同創薬基盤センター」を薬学部内に設置した。その組織は5つの基盤研究部門(シーズ化合物創製部門、オミクス研究部門、ファーマコメタボローム解析部門、生物活性・毒性研究部門および前臨床・臨床試験部門)とそれらを統合する統括部門からなり、医歯薬学系の研究者が配置され、国際共同研究・創薬研究を開始した。 4)科学研究費補助金および共同研究の件数、金額が共に昨年度より増加した。 5)化学物質の安全管理のため、2名の教員が3ヶ月に1回の割合で学部内全研究室における毒劇物の保管・管理状況を点検した。
	達成度： ④ 3 2 1	
社会貢献	1)薬剤師や一般人を対象に薬学公開講座を開催し、薬学に関する最新情報の提供と知識の向上に努める。 2)一般人を対象に薬学公開講演会を開催し、薬学に関する社会の認識を高める。 3)企業等との共同研究等の産学官連携活動を展開し、社会の要請に応える。 4)行政機関等から教員へ要請される各種委員の就任を支援する。 5)薬剤師会等と連携し、薬剤師の生涯学習に貢献する。	1)薬学公開講座を開催し、参加者は28名であった。 2)薬学公開講演会を2回開催し、参加者は1回目51名、2回目14名であった。 3)企業等との共同研究を推進し、件数、金額共に昨年度より増加した。また、受託研究等により官との連携活動を展開した。 4)内閣府食品安全委員会専門委員会委員、岡山県都市計画審議会策研究所科学技術専門調査員など7件の行政機関等委員就任を支援した。 5)学内COE教育研究プロジェクト「地域医療に貢献できる薬剤師卒後教育の基盤形成」(代表者:波多野力薬学部教授)の一環として、薬剤師研修セミナーを2回実施した。1回目(講師:外科医狭間研至先生)には150名の、2回目(講師:本学医療教育統合開発センター寺戸通久先生)には22名の参加があった。また、医療教育統合開発センター主催の「模擬患者参加型教育フォーラム in 岡山」に協力し、参加者は80名であった。
	達成度： ④ 3 2 1	
評価の客観的指標・定義	事項	定義(抜粋)
	学部入試倍率	評価年度の前年に実施した入試と評価年度に実施した入試の志願倍率 算出方法:前期入試、後期入試、AO入試及び推薦入試毎及び各入試の合計により算出した「志願者÷募集人員(小数点3位を四捨五入)」の数値
	大学院充足率	評価年度と評価年度の翌年度の充足率 算出方法:4月入学者の「入学定員÷入学者数(小数点3位を四捨五入)」の数値。
	留年・休学・退学者数	評価年度と評価年度の翌年度の留年・休学・退学者数 留年:正規の在学年数を経過したにも関わらず卒業延期となっている者
	就職率	評価年度のデータが揃わないこと等が想定されるため、比較可能な直近3年程度の推移・傾向から判断する。
	科研費申請率、科研費採択率、採択金額	
共同研究件数、受託研究件数、受入金額	評価年度の前年と評価年度に実施しているとして公表した共同研究及び受託研究件数、受入金額	
【自己評価総括記述欄】※目標及び指標の達成状況について総括し、次年度に向けた改善点等を記載してください。		
薬学部棟の第Ⅱ期耐震改修・新築工事のため多くの研究室が一時移転中という厳しい状況の中で、全教職員の努力により教育、研究および社会貢献のいずれの分野も当初の目標を達成できた。平成23年度は博士前期課程薬科学専攻の学年進行の最終年度であり、2年間における教育の検証を行い、平成24年度からのカリキュラムの改善へ向けて準備する予定である。また、同専攻への薬学部以外からの優秀な人材を求め、入学者選抜試験の改革の必要性が高まっている。研究分野では他の医療系との研究交流をさらに活性化することにより、新たな研究シーズの発見とその臨床応用に向けた取組みを開始するとともに、難治性感染症を標的とした創薬研究教育推進事業、インドの本学新興・再興感染症拠点を中心とした感染症研究およびおかやまメディカルイノベーションOMICにおける分子イメージング技術による創薬研究等を推進する計画である。		

【達成度】4:非常に優れている 3:良好である 2:概ね良好であるが改善の余地あり 1:不十分であり改善を要する

注)本様式は一般的な学部・研究科用であり、部局の特性に合わせ設定した領域・指標により修正してください。